

平安京右京一条三坊六町跡 発掘調査報告書

2 0 2 1

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市中京区西ノ京伯楽町4－6，馬代町3－3で実施した、平安京右京一条三坊六町跡の発掘調査成果報告書である。（京都市番号 20H298）
- 2 調査は、集合住宅建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、株式会社ホームズより株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、望月麻佑、辻 純一（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和2年10月9日～令和2年11月13日である。
- 5 調査面積は220 m²である。
- 6 本文内で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2500）「花園」を調整して作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆は望月が行い、編集は望月、吉川絵里（文化財サービス）が行った。
- 10 現地での記録写真撮影は望月が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 11 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 望月麻佑、辻 純一、田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平、中 優作
（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 望月麻佑、田中慎一、多賀摩耶、野地ますみ、甲田春奈、若山美帆、
赤羽 香、溝川珠樹、内牧明彦（以上、文化財サービス）
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1995年
に依った。
- 14 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。
（敬称略）

國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	6

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	8
2 検出遺構	8
(1) 第1面	8
(2) 第2面	14
3 出土遺物	19
(1) 第1面遺構出土遺物	19
(2) 第2層出土遺物	19
(3) 第2面遺構出土遺物	21

第Ⅳ章 まとめ

1 南北朝期～室町時代	24
2 平安時代前期～中期	25

図版目次

図版1	遺構	1. 南区 第1面調査区全景（北から）
		2. 北区 第1面調査区全景（南から）
図版2	遺構	1. 南区 溝0001（北から）
		2. 北区 溝0001（北から）
図版3	遺構	1. 南区 第2面調査区全景（北から）
		2. 北区 第2面調査区全景（南から）
図版4	遺構	1. 南区 小堤状遺構0021・溝0005（北から）
		2. 北区 土坑0011（西から）

図版 5	遺物	1. 第 1 面 溝 0001 出土遺物
		2. 第 2 層 出土遺物
図版 6	遺物	1. 第 2 面 土坑 0006 出土遺物
		2. 第 2 面 土坑 0012・0015・0016 出土遺物

挿図目次

図 1	調査地位置図（1：2500）	1
図 2	調査経過写真	2
図 3	調査区割・基準点配置図（1：150）	4
図 4	既往調査位置図（1：5000）	6
図 5	調査区北壁・南壁断面図（1：50）	9
図 6	調査区東壁断面図（1：50）	10
図 7	調査区西壁断面図（1：50）	11
図 8	第 1 面平面図（1：100）	12
図 9	溝 0001 平面図（1：100）、断面図（1：50）	13
図 10	第 2 面平面図（1：100）	15
図 11	溝 0005・小堤状遺構 0021 平面図（1：100）、断面図（1：50）	16
図 12	土坑 0016 平面・断面図（1：50）	17
図 13	土坑 0011 平面・断面図（1：50）	18
図 14	出土遺物 1（1：4）	20
図 15	出土遺物 2（1：4）	22
図 16	明治二十五年仮製地形図	24

表目次

表 1	既往調査一覧表	7
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	19
表 4	遺物観察表	26

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

調査地は京都市中京区西ノ京伯楽町4-6、馬代町3-3に所在する。民間開発に伴う発掘調査である。対象地は平安京右京一条三坊六町に該当する。また、東西方向の条坊路である近衛大路、南北方向の馬代小路の交差点をも含む。これらのことから平安京条坊復元の重要な資料となる馬代小路東側溝・近衛大路南側溝などの検出が期待された。

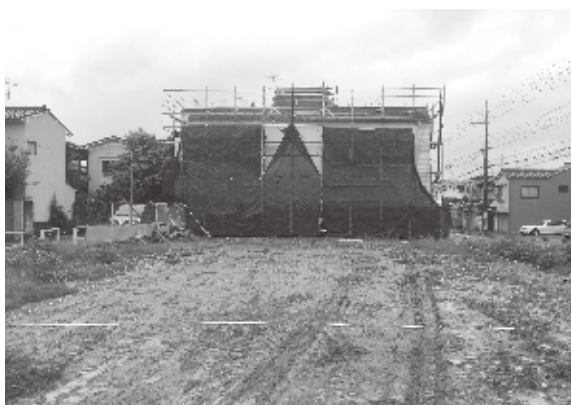
建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が行われた。その結果、遺構および遺物の存在が確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、開発事業者である株式会社ホームズから文化財サービスに委託された。

2 調査の経過（図2）

発掘調査は、2020年10月9日より資機材搬入・水道敷設、10月12日より現地作業に着手し、11月13日に全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により東西11.0m、南北20.0m、面積220.0㎡に設定したが、発生する排土の置場を確保するために、調査区を北区・南区で分け、反転調査を実施した。南区を先行して調査を行い、10月12日より近現代盛土及び近世耕作土を重機掘削によって除去、その後、人力によって遺構成立面の精査および遺構検出を行った。近世耕作土を除去し、黒褐色砂泥層をベースとする面を第1面、第1面の遺構ベース層を除去し、地山であるにぶい黄橙色シルト～明褐色砂礫層をベースとする面を第2面と設定し、各遺構面において、遺構を掘削後、記録作業を実施した後に下層確認を行い、10月22日に南区の調査を終了した。10月26日より南区を埋め戻し、北区の重機掘削を行った。南区と同様に第1面、第2面において調査を行い、11月12日に北区の埋め戻しを行い、13日に終了した。



図1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査前（北から）



2. 重機掘削作業（北西から）



3. 溝0001 掘削作業（北から）



4. 南区層間掘削作業（北西から）



5. 調査区反転作業（南西から）



6. 北区第1面遺構掘削作業（北東から）



7. 埋め戻し作業（北西から）



8. 調査完了後（北から）

図2 調査経過写真

なお、写真撮影機材は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35 mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

また、各遺構面の検出段階及び掘削完了段階において、文化財保護課の検査および指導を受けた。さらに、各段階において、本調査の検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏に検証していただき、調査に対する助言をいただいた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、VRS 測量により調査地敷地内にM. 1、M. 2を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

M. 1 X = -108,576.399 m Y = -24,912.699 m H = 47.759 m

M. 2 X = -108,592.670 m Y = -24,912.525 m H = 47.529 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3 m四方のグリッドを設定した。Y軸にアラビア数字を西から東に、X軸にアルファベットを北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した望月麻佑、編集作業は望月、吉川絵里が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。



図3 調査区割・基準点配置図（1：150）

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は上ノ下立売通（妙心寺通）と馬代通の交差点南東角に位置する。平安京の条坊では右京一条三坊六町の北西隅にあたり、調査地の北側は近衛大路南側、西側は馬代小路東側が含まれている。

『拾芥抄』所収「西京図」によると当町は空白地帯である。二町分東に位置する一条二坊十四町では「叙弘知行」と図示されており、京内の西と東に設置されていた獄舎の一つである西獄の役人の所領であったと伝えられている。また、馬代小路に沿って三町分南へ下った二条三坊十町では「前肥前町成季領」（藤原成季領）、その西隣の十五町では「月輪寺領」と記されており、調査地周辺は荘園化が進んでいたことが想定される。江戸時代になると、当地は西京村に編制され、馬代小路が西に隣接する木辻村との境界になっているが、「西京」という名称は鎌倉時代から文献にあらわれている。『勘仲記』弘安十一（1288）年八月一日条では、北野天満宮に仕える麴造りを生業とした「西京神人」という称が記されており、『北野誌』によると、「西京神人」は右京の一条から二条の間に七ヶ所の御供所に分かれて居住していたとされている。このことから、「西京村」は「西京神人」の住まう集落の前身であると考えられる。明治時代以降における当地の土地利用に関しては、明治二十七（1894）年に作成された『平安通志』付図「平安京舊址實測全圖」によると、条坊復元線のずれを考慮した上で、馬代小路が一条大路から三条大路にかけて小字境や水路として利用されていることが窺える。明治二十五（1892）年に作成された『仮製地形図』においても、馬代小路が水路として、調査地が耕作地として描かれている。

当地の北西には妙心寺が存在する。妙心寺は、花園上皇が花園離宮を禅寺に改めることを発願し、建武四（1337）年に開創された。臨済宗妙心寺派の本山である。六世の拙堂宗朴の代に、応永の乱にて反旗を翻した大内義弘と深い関わりがあったため、将軍足利義満の怒りを買うことになり、応永六（1399）年に寺領を没収され一時中絶した。寺号は「龍雲寺」に改名させられたが、永享四（1432）年には返還され、七世の日峰宗舜によって中興された。応仁の乱によって伽藍を焼失するものの、九世の雪江宗深によって再興し、戦国期以降は有力大名や皇室の援護を受けて大いに栄え、現在見えるような境内の広さとなった。

参考文献

下中邦彦「京都市の地名」『日本歴史地名体系第二七巻』 平凡社 1979年

竹貫元勝「妙心寺」『妙心寺』開山無相大師六五〇年遠諱記念 読売新聞社 2009年

2 既往の調査（図4）

右京一条三坊六町内における調査は試掘・立会調査のみ行われており、発掘調査は今回が初例となる。過去の試掘・立会調査では、平安時代の土坑（7）や包含層・湿地堆積（9・10）が検出されている。調査地の南に隣接する一条三坊五町では、平安時代中期の掘立柱建物や柵列、祭祀土坑などが見つかっており（4・5）、東に隣接する一条三坊三町においても、平安時代中期の掘立柱建物や柵列が見つかっている（2）。調査地の北西の町である一条三坊九町では、平安時代前期の門跡や寝殿造の原型とされる大型掘立柱建物などが見つかっており（12）、平安時代前期～中期において、右京一条三坊の土地が活発に利用されていたことが窺える。

調査地周辺における馬代小路の調査について、1990年代に行われたJR山陰本線高架工事に伴う調査（6-6A）と2007年度に行われた花園大学拈花館新設に伴う調査（17）が挙げられる。6-6A地点での調査では、中御門大路に伴う北側溝と北築地内溝が検出されているが、馬代小路に伴う遺構は見つかっていない。17地点の調査では、調査地西側を拡張した部分にて溝状遺構を検出しており、馬代小路東側溝の可能性があるとしている。近衛大路の調査に関しては、調査地より約100m東の位置で行われた立会調査のみであり（8）、平安時代前期以降の土坑と平安時代前期の包含層を確認しているが、路面は検出されていない。



図4 既往調査位置図（1：5000）

表1 既往調査一覧表

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	右京一条三坊二町	発掘	平安時代の鷹司小路南側溝・区画溝・小径・橋脚跡・埋納遺構・掘立柱建物・土坑、中世の溝、近世以降の溝・土坑を検出。	「平安京右京一条三坊」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概報』埋文研 1998年
2	右京一条三坊三町	発掘	平安時代中期の建物・柵列・土坑などを検出。	『平安京右京一条三坊三町跡』2006-21 埋文研 2007年
3	右京一条三坊四町、宇多小路、中御門大路	発掘	平安時代の中御門大路北側溝・井戸・自然流路を検出。	「平安京右京一条三坊四町」『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
4	右京一条三坊五町	発掘	弥生時代の溝、平安時代中期の建物・柵列・溝・土坑・ピット、平安時代中期以降の建物・柵列・溝・ピットを検出。	「右京一条三坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』埋文研 1983年
5	右京一条三坊五町	発掘	古墳時代？の溝、平安時代の建物・柱穴・土坑、室町時代の暗渠、江戸時代の溝を検出。	「右京一条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1984年
6	右京一条三坊五町・十二町、二条三坊一町、馬代小路、中御門大路	発掘	右京一条三坊十二町にあたる5A・5B区にて平安時代前期の園池・溝、平安時代中期の井戸・溝・柵列・柱穴、室町時代～江戸時代の耕作土層、右京一条三坊五町にあたる6A～6C区にて平安時代中期の東西溝（中御門大路北築地内溝？）、平安時代後期の流路、室町時代の耕作溝、右京二条三坊一町にあたる7区にて平安時代中期の溝・柱穴、室町時代の柱穴、室町時代から江戸時代の耕作溝を検出。	「平安宮左馬寮－朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1999年
7	一条三坊六町	立会	平安時代前期・時期不明の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
8	近衛大路	立会	時期不明の土坑、平安時代前期の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
9	一条三坊六町	立会	平安時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
10	一条三坊六町	試掘	平安時代の湿地堆積を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
11	右京一条三坊九・十町、馬代小路	立会	平安時代中期の溝・柱穴・土坑・包含層を検出。	「平安京右京一条三・四坊・五位山古墳」『京都嵯峨野の遺跡・広域立会調査による遺跡調査報告-J』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 埋文研 1997年
12	右京一条三坊九・十町、鷹司小路	発掘	古墳時代～奈良時代の建物跡・溝、平安時代初頭～前期の門跡・建物・溝・土坑・井戸など、平安時代中期の建物・柵列を検出。	「平安京跡右京一条三坊九・十町の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第73号（財京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999年
13	右京一条三坊十二町	発掘	平安時代の溝・柵列、中近世の池、近世の耕作溝・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊九町発掘調査報告』関西文化財調査会 1997年
14	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町	発掘	平安時代前期の路面・溝、平安時代中期の溝、平安時代後期以降の溝・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』2011-4 埋文研 2012年
15	右京一条二坊十三町	発掘	平安時代以前の流路跡・池状遺構、平安時代の土坑・井戸・柱穴・池・落込み、室町時代の溝・柱穴・落込み・耕作土層、桃山時代～江戸時代の土塁基底部・溝・柱穴・柵列を検出。	「平安京右京一条二坊」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2002年
16	右京一条二坊十五町、鷹司小路	発掘	平安時代前期のピット・包含層、鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・柵列・柱穴、桃山時代の溝・御土居の濠の南肩を検出。	「平安京右京一条二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991年
17	右京二条三坊八町、中御門大路	発掘	平安時代の建物・柵列・溝・土坑・井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸、江戸時代の土坑を検出。また、調査区西側拡張にて馬代小路東側溝の可能性のある溝を検出。	『平安京右京二条三坊八町 附 平安京右京一条四坊一・二町』花園大学構内調査報告Ⅶ 2010年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図5～7）

調査地における現標高は、北部が約 47.7 m、南部が約 47.5 mであり、北から南に向かって緩やかに低くなっている。調査地の基本層序は、近現代盛土を除き 5 層に区分した。うち、3 層以下は自然堆積による地山層と考えられる。

地表面下約 0.6 ～ 0.7 m は近現代盛土であるが、南東部では 1.5 m 以上の層厚があり、地山面まで盛土が達していた。その下が灰色～灰褐色砂泥の近世耕作土である。層厚は約 0.1 ～ 0.3 m で、南東部以外を除き調査区全体に分布する。これを 1 層とし、当該層を除去した面を第 1 面と設定した。第 1 面直下には黒褐色砂泥～粗砂層が堆積する。出土する遺物から南北朝期の整地層と考えられる。層厚は最も薄い北西部にて約 0.1 m、最も厚い南東部にて約 0.6 m で、南西部では分布が確認されなかった。南東部では 1 層の分布が確認されないため、近世耕作層により当該層以下が削平を受けているとみられる。これを 2 層とし、当該層を除去した面を第 2 面と設定した。3 層である明褐色砂礫層は調査区西半部にて南北方向に帯状に分布する。4 層は調査区西半部にて 3 層下に部分的に分布する黒褐色粗砂層である。どちらも無遺物層であり、平安京造営以前の旧自然河川の流路跡及び洪水堆積層と考えられる。5 層はにぶい黄橙色シルトで、調査区全域に分布する。

2 検出遺構

第 1 面では、調査区西側にて南北方向の溝状遺構を検出した。調査区東半部に広がる黒褐色砂泥層上面では、近世耕作溝以外の遺構は確認されなかった。第 2 面では、溝状遺構、土坑、小堤状遺構を検出した。第 1 面の溝状遺構からは室町時代の遺物、第 2 層、第 2 面の遺構からは南北朝期の遺物が主に出土している他、平安時代前期～中期の遺物も混入していた。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代	溝 0001	
南北朝期	溝 0005、小堤状遺構 0021、土坑 0006・0007・0011・0012・0015・0016	

（1）第 1 面（図8・図版1）

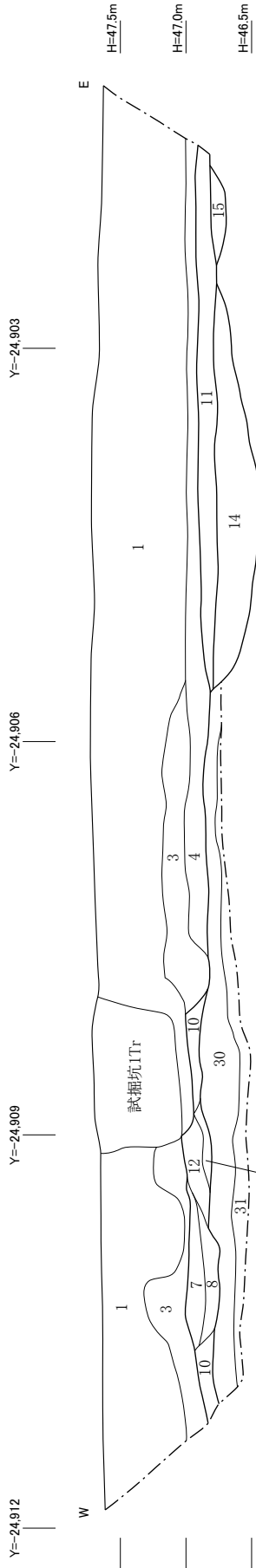
調査区西側にて、室町時代の南北方向の溝状遺構 1 条を検出した。当該遺構以外に、調査区東半部にて灰褐色砂泥を埋土とする近世耕作溝を数条検出している。

〔溝〕

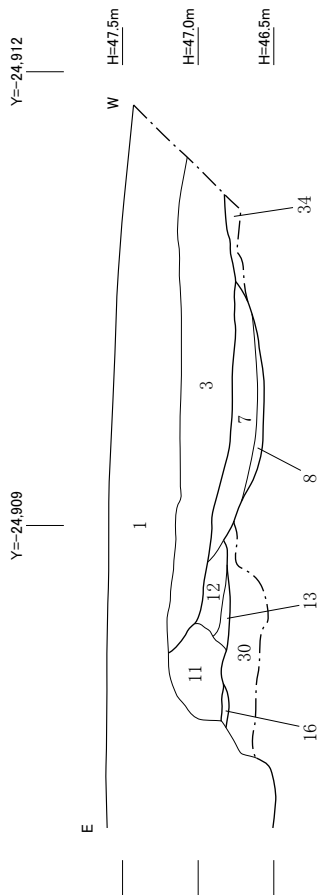
溝 0001（図9・図版2）

調査区西側にて検出した南北方向の溝である。馬代小路東築地心推定ラインを溝の西肩とする。幅約 1.0 ～ 2.0 m、検出面から遺構底までの深さは約 0.25 ～ 0.30 m で、X=-108,582 m 以北は正方位

北壁



南壁



- 1 近代代盛土
2 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫・10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混 風倒木跡
3 5Y4/1灰色砂泥 小石少量混 [第1層]
4 7.5YR4/2灰褐色砂泥 土器粒少量混 [土坑0016]
5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混 大礫混
6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 礫・10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混
7 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 礫混 しまり弱 [第2層]
8 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 礫多量混 しまり強 [溝0001]
9 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 土器粒混 [土坑0004]
10 10YR2/3黒褐色砂泥～粗砂 礫多量混 しまり強 [第3層]
11 10YR2/3黒褐色砂泥 土器粒・小石混 [第4層]
12 5YR4/4にぶい、赤褐色粗砂と礫の混土 しまり強
13 5YR3/1黒褐色粘土と礫の混土 しまり強
14 10YR2/2黒褐色砂泥 土器粒・10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混 礫混 [土坑0015]
15 10YR2/2黒褐色砂泥 土器粒・10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混 礫混 [土坑0017]
16 10YR3/1黒褐色砂泥 土器粒・礫多量混 [溝0005]
17 10YR3/1黒褐色砂泥 10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混 [土坑0007]
18 10YR2/2黒褐色砂泥 10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混
19 10YR2/2黒褐色砂泥 10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混
20 10YR2/1黒褐色砂泥 土器粒少量混
21 10YR2/2黒褐色砂泥 土器粒・10YR7/2にぶい、黄橙色シルト粒混
22 10YR2/2黒褐色砂泥 土器粒・10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混
23 10YR2/2黒褐色砂泥 10YR7/2にぶい、黄橙色シルトブロック多量混
24 10YR2/3黒褐色砂泥 大礫・10YR7/2にぶい、黄褐色シルトブロック多量混 [土坑0006]
25 10YR2/3黒褐色砂泥 土器粒・礫・10YR7/2にぶい、黄褐色シルトブロック混
26 10YR3/1黒褐色砂泥 土器粒・小礫・炭化物混 [土坑0013]
27 10YR2/3黒褐色砂泥 礫混
28 10YR2/3黒褐色砂泥～粘土 10YR7/2にぶい、黄褐色シルトブロック・大礫混 [土坑0011]
29 10YR2/2黒褐色砂泥と10YR7/2にぶい、黄褐色シルトの混土
30 7.5YR5/6明褐色砂泥 礫多量混 しまり強 [第3層]
31 10YR4/2灰黄褐色粗砂 礫多量混
32 2.5Y3/2黒褐色粗砂 礫多量混 粘性有 [第4層]
33 2.5Y3/2黒褐色粗砂 礫多量混
34 10YR7/2にぶい、黄褐色シルト [第5層]

図5 調査区北壁・南壁断面図 (1 : 50)

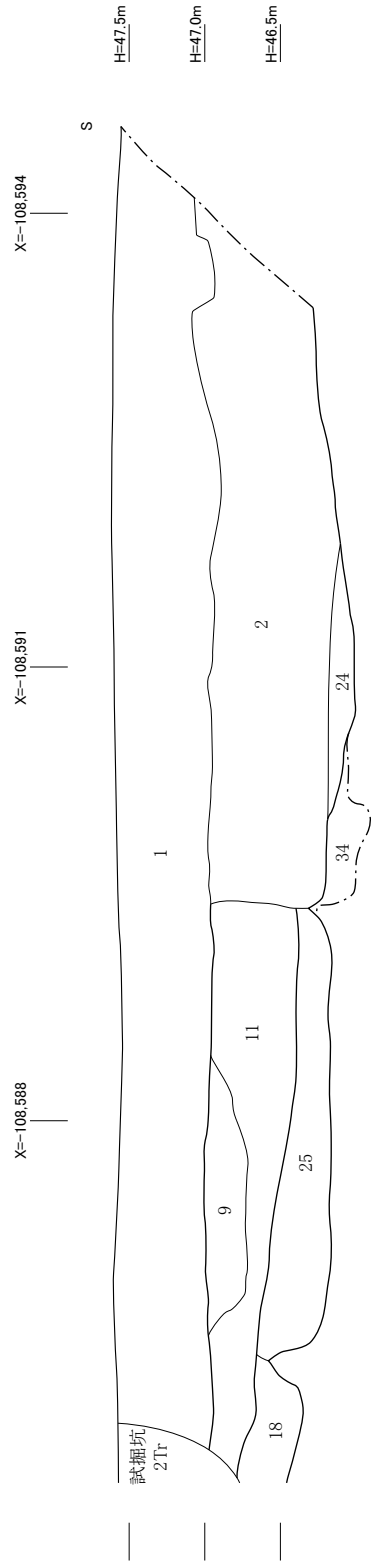
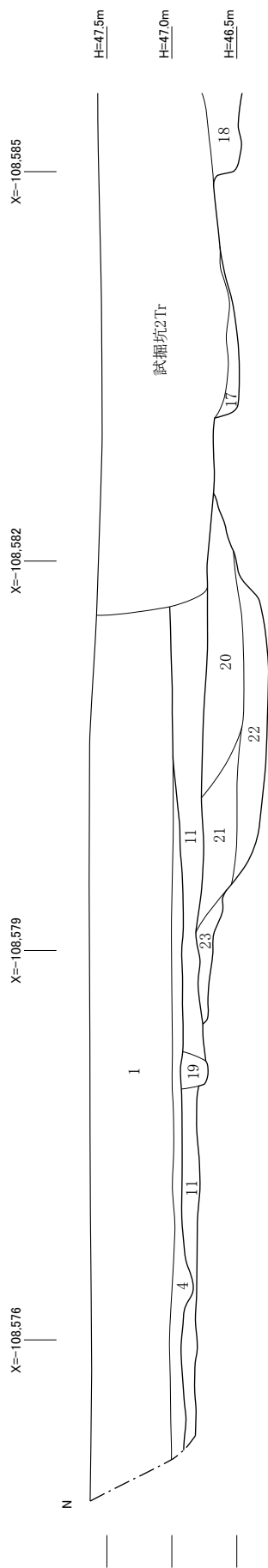


図6 調査区東壁断面図 (1 : 50)

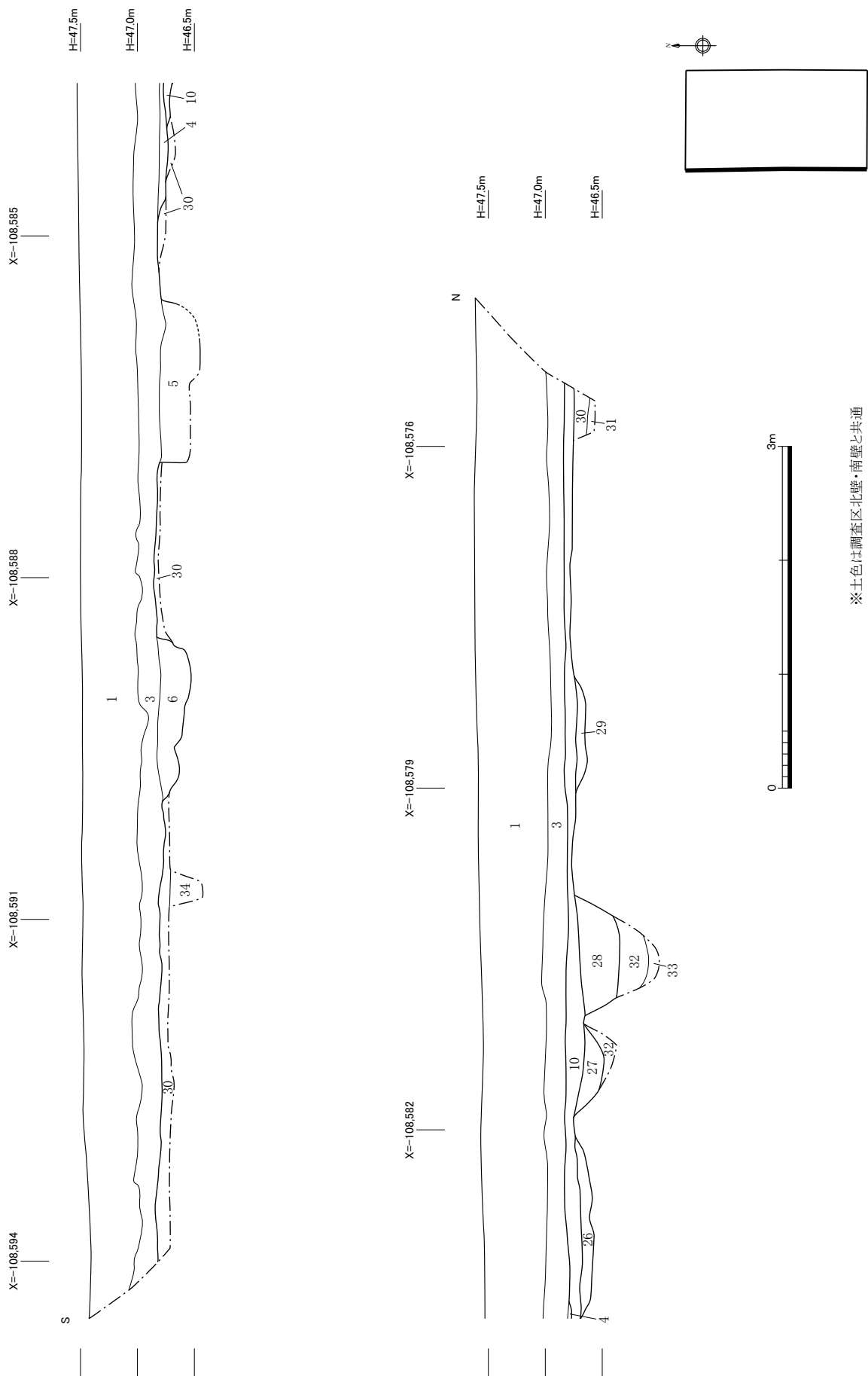


図7 調査区西壁断面図 (1 : 50)

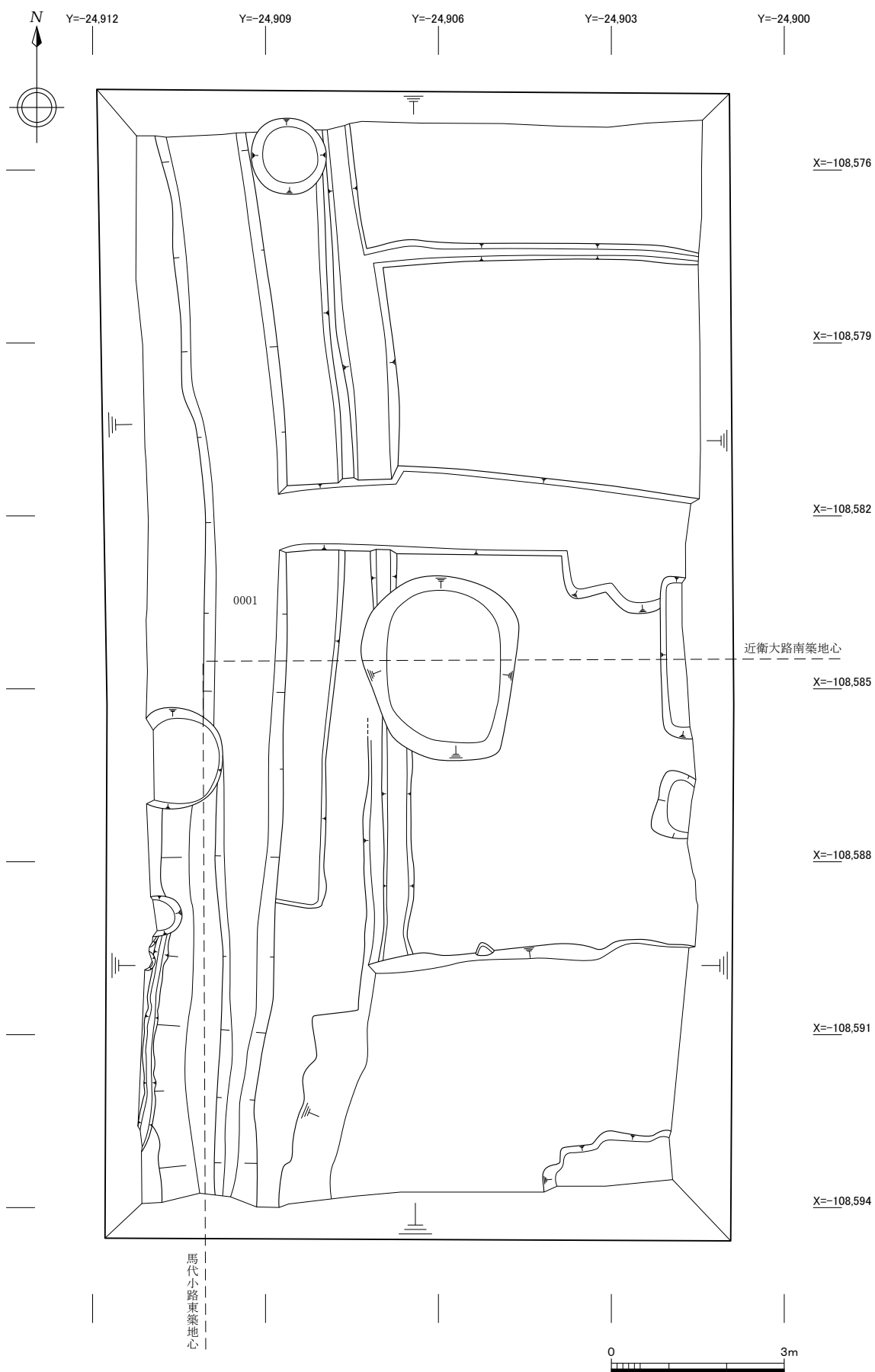


図8 第1面平面図 (1 : 100)

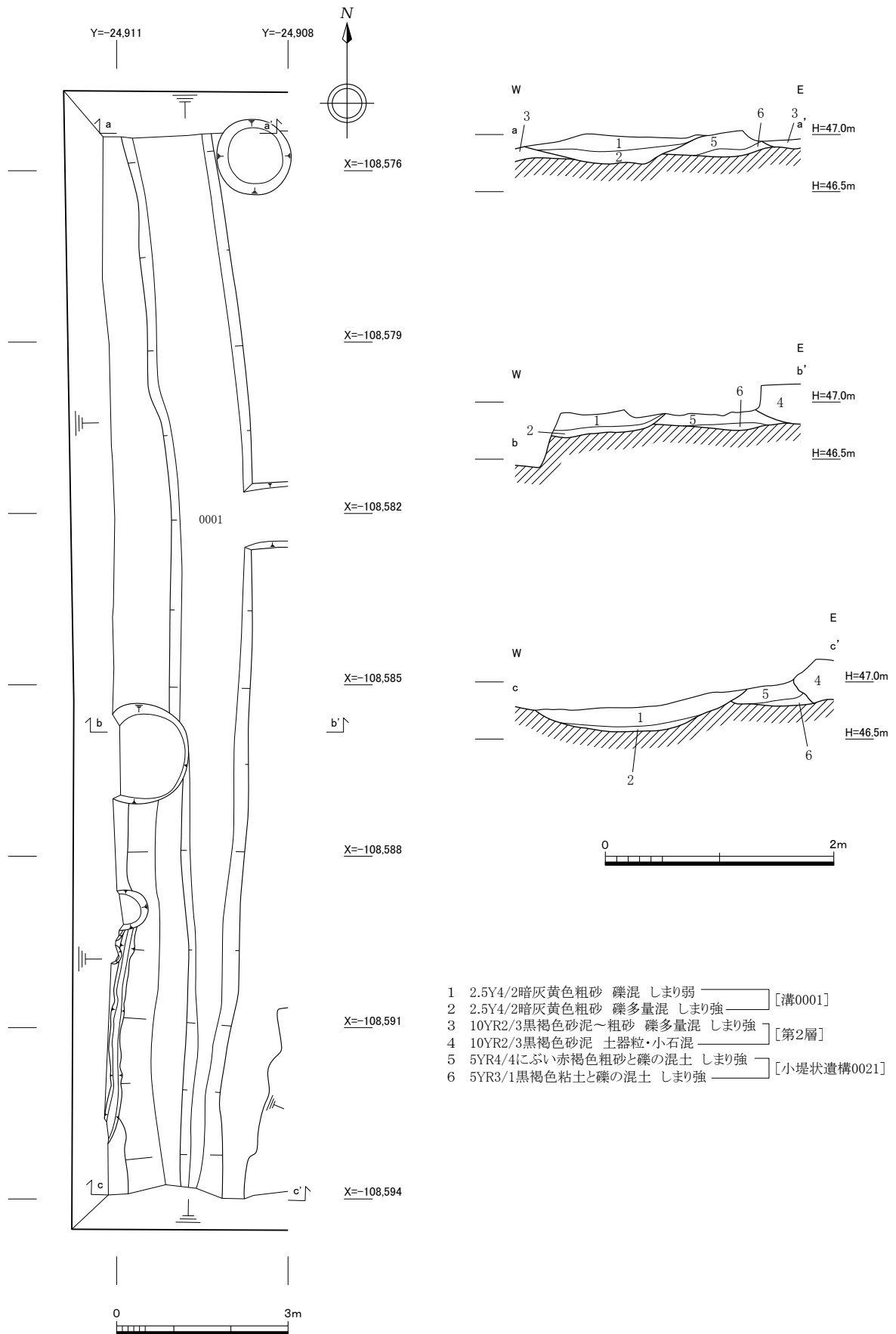


図9 溝0001平面図（1：100）、断面図（1：50）

より 7.3° 西に振る。埋土は上層が暗褐色粗砂、下層が暗褐色砂礫となる。上層及び下層より、室町時代の土師器や陶磁器類が出土している他、平安時代中期の緑釉陶器も混入していた。また、溝の東肩を、地山である明褐色砂礫層より約 0.2 m 高く、赤褐色砂礫層が幅約 0.5 ～ 1.0 m で小堤状に盛られていた。この小堤状遺構の東肩は 2 層除去後に検出されていることから、造築時期は第 1 面の成立以前と考えられる。

(2) 第 2 面 (図 10・図版 3)

黒褐色砂泥層を埋土とする溝状遺構 1 条、土坑 6 基と、溝 0001 の東肩として機能していた小堤状遺構を検出した。土坑は不定形な形状を呈したものが多く、地山であるにぶい黄橙色シルトが露頭する調査区東半部にておおよそ検出されていることから、シルト土の採取のための土取り穴であったと推定される。

〔溝〕

溝 0005 (図 11・図版 4-1)

調査区中央部南にて検出した南北方向の溝である。検出長は約 10.0 m であり、溝の北端は土坑 0012 部分にて止まっている。幅約 0.8 m、検出面から遺構底までの深さは約 0.12 m。土師器・須恵器の細片が少量出土している他、鎌倉時代以降の平瓦が見つかった。

〔小堤〕

小堤状遺構 0021 (図 11・図版 4-1)

第 1 面にて検出された溝 0001 だが、その東肩が地山である明褐色砂礫層より約 0.2 m 高く、赤褐色砂礫層が幅約 0.5 ～ 1.0 m で小堤状に盛られていた。小堤状遺構の東肩は 2 層である黒褐色砂泥層を除去した後に検出されたので、当該遺構の成立時期は第 2 面に属すると判断した。同じく第 2 面の遺構である土坑 0011・0012 はその築土の直下で検出されていることから、小堤はこれらの土坑群が廃絶した後につくられ、東側のみ整地によって埋没し、西側は溝の東肩として機能したと考えられる。小堤築土からは平安時代の瓦の細片が少量出土している。

〔土坑〕

土坑 0006

調査区南東部の東壁際で検出した。2 重に重なり合った不定形な形状の土坑である。検出長は南北約 6.9 m、東西約 1.3 m であり、東側と南側は調査区外に延びている。検出面から遺構底までの深さは、北側が約 0.6 m、南側が近現代の攪乱により大きく削平されており約 0.2 m の検出にとどまった。遺物は、南北朝期の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦が多量出土しており、平安時代前期～中期の須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦片も混入していた。良質な土であるにぶい黄橙色シルトを掘り込んでいることから、土取り穴と考えられる。

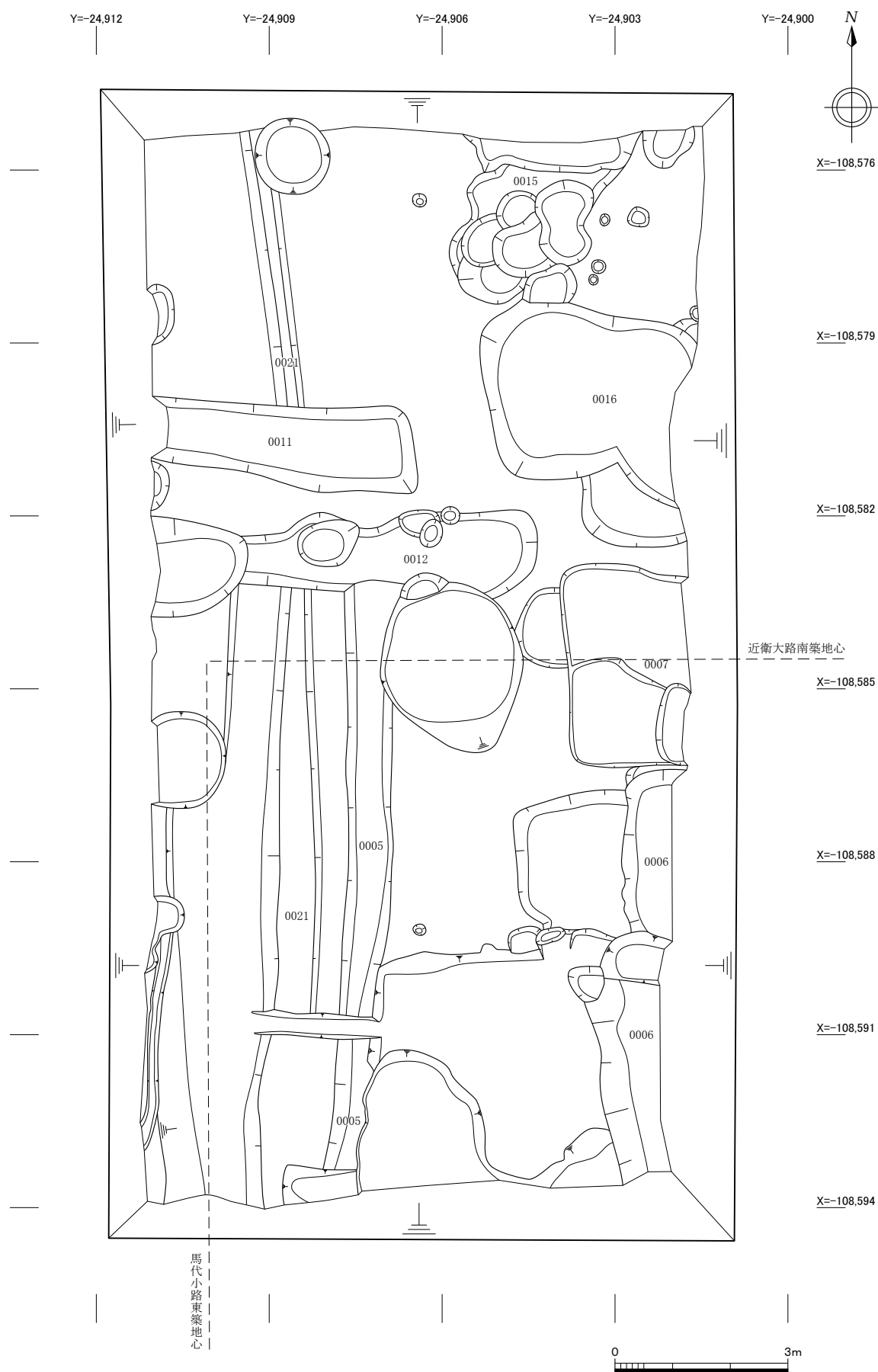


図10 第2面平面図 (1 : 100)

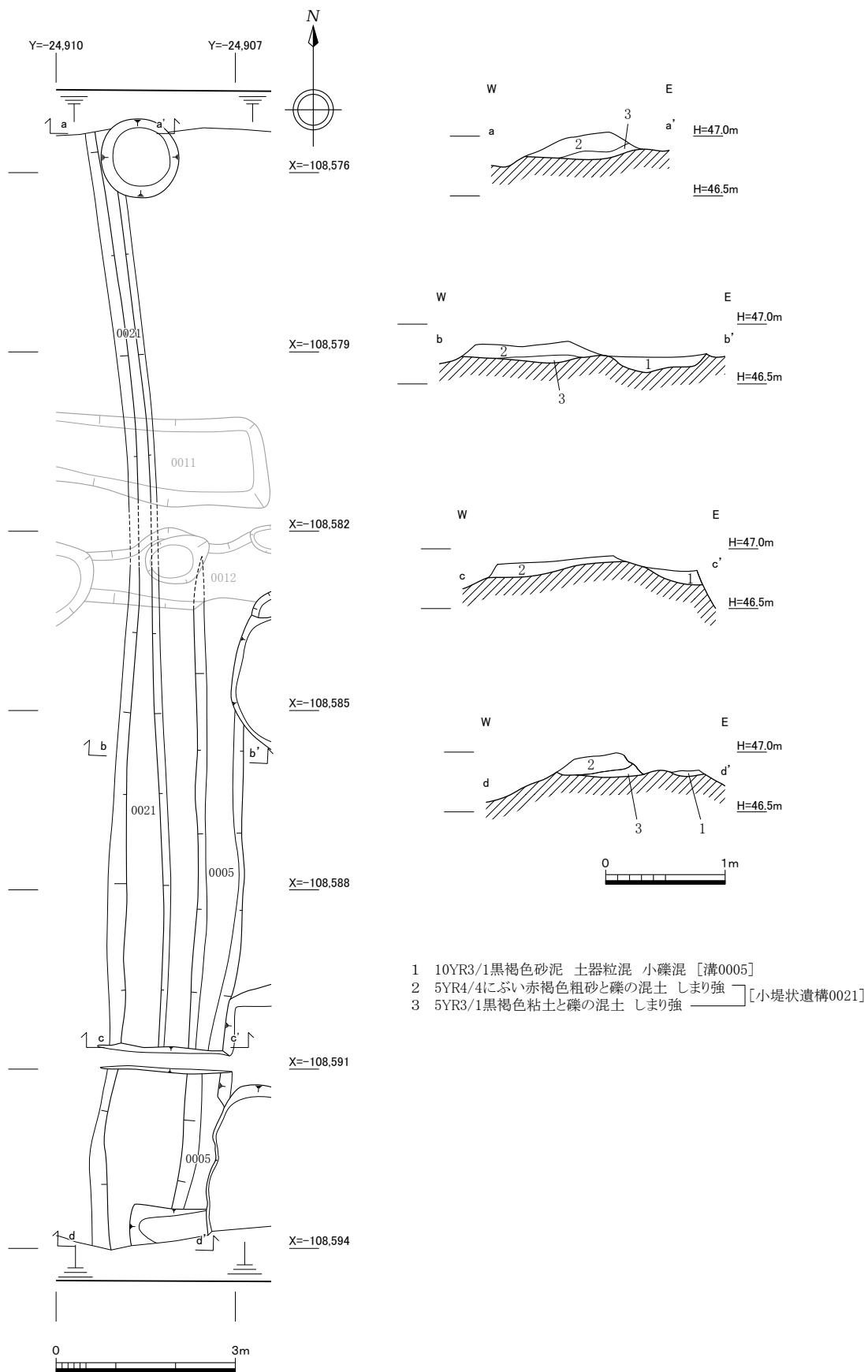


図11 溝0005・小堤状遺構0021平面図（1：100）、断面図（1：50）

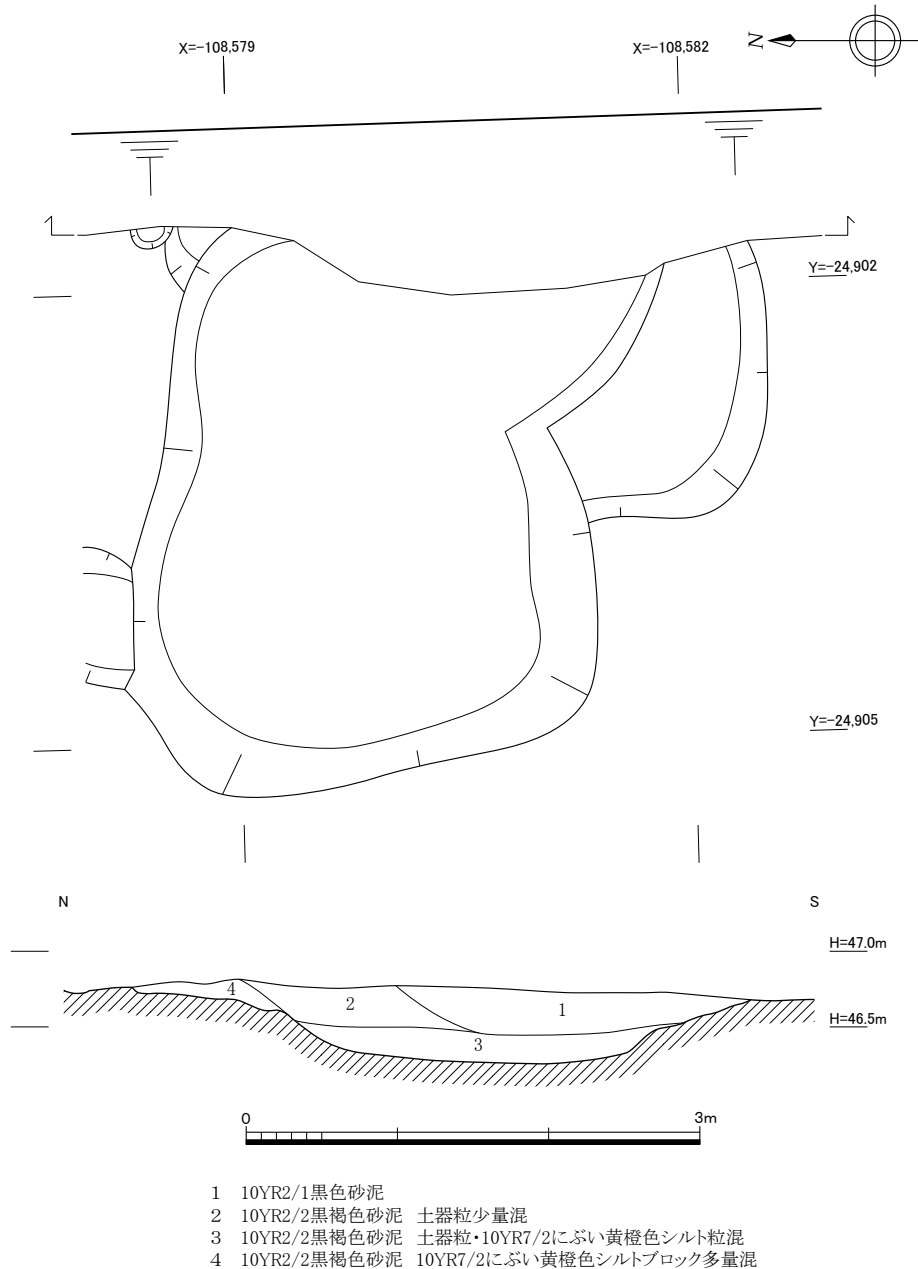


図12 土坑0016平面・断面図（1：50）

土坑 0007

調査区東部中央の東壁際で検出した。3重に重なり合った不定形な形状の土坑である。検出長は南北約3.5m、東西約2.1mであり、東側は調査区外に延びている。検出面から遺構底までの深さは最大深約0.4m、最小深約0.1mであり、にぶい黄橙色シルトを掘り込んでいる。遺物は土師器、瓦質土器、平安時代の軒丸瓦の細片が少量出土した。土取り穴と考えられる。

土坑 0012

調査区中央部西寄りで検出した不定形な形状の土坑である。検出長は南北約1.5m、東西約5.0m。検出面から遺構底までの深さは最大深約0.4m、最小深約0.2mであり、明褐色砂礫層を掘り抜き、

にぶい黄橙色シルトまで掘り込んでいる。遺物は平安時代前期～中期の緑釉陶器、灰釉陶器、瓦片が出土した。土取り穴と考えられる。

土坑 0015

調査区北部東寄りの北壁際で検出した。7重に重なり合った不定形な形状の土坑である。検出長は南北約 2.9 m、東西約 2.5 m であり、北側は調査区外に延びている。検出面から遺構底までの深さは最大深約 0.6 m、最小深約 0.3 m で、にぶい黄橙色シルトを掘り込んでいる。遺物は 12～13 世紀の中国産の白磁の四耳壺が出土している他、平安時代前期～中期の緑釉陶器、灰釉陶器も混入していた。土取り穴と考えられる。

土坑 0016 (図 12)

調査区東部中央北寄りにて検出した不定形な形状の土坑である。検出長は南北約 3.1 m、東西約 3.8 m であり、東側は調査区外に延びている。検出面から遺構底までの深さは最大深約 0.5 m、最小深約 0.2 m で、にぶい黄橙色シルトを掘り込んでいる。遺物は平安時代前期～中期の土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。土取り穴と考えられる。

土坑 0011 (図 13・図版 4-2)

調査区西部中央の西壁際で検出した方形形状の土坑である。検出長は南北約 4.5 m、東西約 1.0～1.5 m であり、西側は調査区外に延びている。検出面から遺構底までの深さは約 0.4～0.5 m であり、断面形は箱型を呈する。遺物は鎌倉時代以降の土

師器、須恵器、瓦の細片が少量出土している。近衛大路南側溝推定ラインに遺構が位置しているが、東端が調査区の中央で止まっており、東壁の立ち上がりもほぼ垂直であることから、南側溝である可能性は低く、平安時代の条坊制度が衰退した後につくられたものと考えられる。調査区西側に薄く広がる明褐色砂礫層を掘り抜き、にぶい黄橙色シルト層まで達していることから、土取り穴である可能性も考えられる。

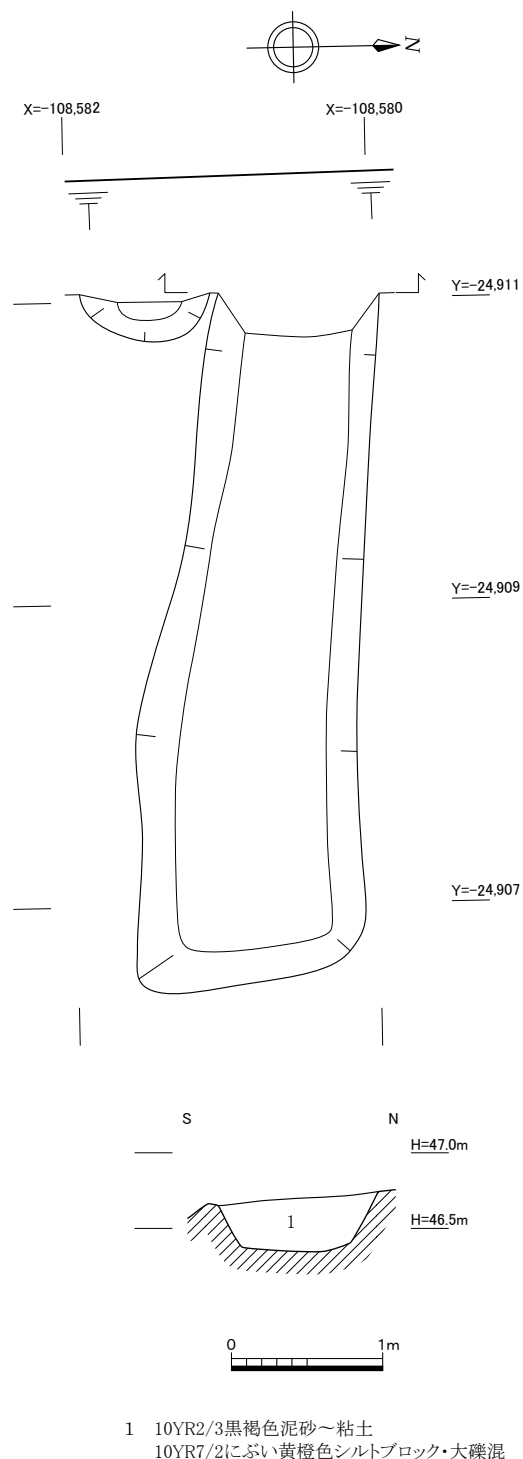


図 13 土坑 0011 平面・断面図 (1 : 50)

3 出土遺物

遺物はコンテナで6箱分が出土した。土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦が出土している。第1面の遺構の埋土からは室町時代、第2面の遺構の埋土からは南北朝期に属する遺物が主に出土したが、平安時代前期～中期に属する遺物も多く混入していた。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
室町時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、青磁		土師器1点、焼締陶器1点、青磁1点	施釉陶器1点	
南北朝期	土師器、須恵器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、青磁、白磁、瓦		土師器6点、須恵器1点、瓦質土器4点、施釉陶器1点、焼締陶器1点、青磁1点、白磁2点、瓦2点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、瓦		土師器2点、須恵器2点、緑釉陶器4点、灰釉陶器3点、青磁1点、瓦1点		
合計		9箱	34点(3箱)	1点(1箱)	5箱

* コンテナ箱数は、整理段階で3箱増加した。

(1) 第1面遺構出土遺物

溝0001(図14・図版5-1)

1は青磁の碗である。口縁部のみであり、残存器高3.6cmを測る。内外面に明緑灰色の釉薬を施釉し、外面に雷文、内面に劃花文を施す。龍泉窯系で、15世紀前半の所産と考えられる。2は土師器の皿Sである。口縁部のみの残存となり、口径8.9cmを測る。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部でわずかに内湾し端部は丸く収められる。9A段階に属し、15世紀前半に比定される。3は備前産の播鉢である。底部のみであり、残存器高3.6cmを測る。内面に摺目を施すが、小片のため単位は不明である。4は緑釉陶器の椀の底部である。底面に糸切り痕を残し、断面方形形状の高台が貼り付けられている。高台径は8.6cm。胎土は軟質で内外面に灰オリーブ色の釉薬が施されており、体部内面に圈線を施す。1は上層である暗灰黄色粗砂層、2～4は下層である暗灰黄色砂礫層より出土している。

(2) 第2層出土遺物(図14・図版5-2)

5～7は土師器の皿である。5・6は皿Nで、5は口径8.0cm、器高1.6cmを測る。体部は直線的に外方へ立ち上がり、端部は丸く収められる。体部外面下半には指押さえ痕が残る。6は口径10.6cm、器高2.4cmを測る。体部が外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。7は皿Sで、口径10.0cm、器高2.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。何れも8A段階に属し、14世紀後半に比定される。8は古瀬戸の仏花瓶の底部である。底径4.6cmで、外面に灰オリーブ色の釉薬を施し、底面に回転糸切り痕を残す。9は常滑産の甕の口縁部である。小片につき、口径の復元は不可能であった。口縁端部が上方に拡張しており、下方

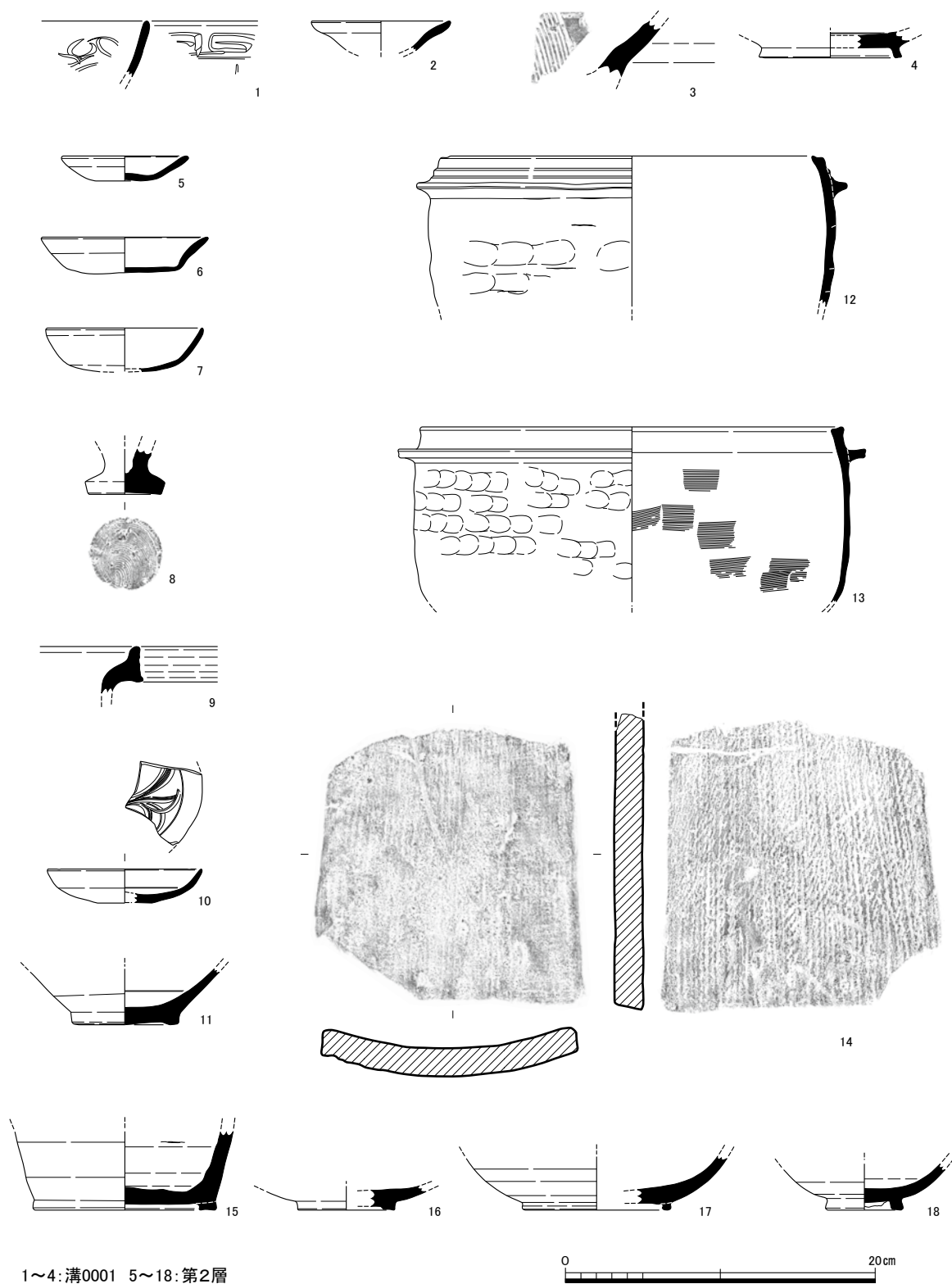


図14 出土遺物1（1：4）

は僅かに突き出ているのみである。13 世紀中頃の所産と考えられる。10 は青磁の皿である。口径 9.8 cm、底径 3.6 cm、器高 2.2 cm であり、見込みに劃花文を施す。同安窯系で、13～14 世紀に属すると考えられる。11 は白磁碗の底部である。背の低い断面方形の高台を削り出しており、高台径は 5.9 cm である。内面のみ灰白色の施釉を施す。華南産系で、12 世紀の所産と考えられる。12・

13は瓦質土器の羽釜である。12は口径23.4cm、残存器高9.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部にてやや内傾して、端部は平坦に収められる。体部外面にはオサエの指頭痕が残り、内面はナデ調整で仕上げられる。口縁部付近には短い鰐が貼り付けられる。13は口径26.8cm、残存器高11.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部にてやや内傾して、端部は外側に肥厚する。体部外面にはオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整が施されている。口縁部付近には短い鰐が貼り付けられる。何れも14世紀後半に属すると考えられる。14は平瓦である。残存長13.0cm、幅18.2cm、厚さ1.9cmを測る。凸面は縄目圧痕が残り、凹側の広端幅側はナデによって縄目圧痕が消されているが、狭端幅側は残存する。焼成は硬質である。12世紀以降の瓦か。15は須恵器の底部で、壺あるいは広口瓶と考えられる。底面はヘラ切りのちナデの後、断面方形状の高台が貼り付けられており、高台径は11.6cmである。篠窯産で、9世紀のものか。16は緑釉陶器の皿の底部である。高台は断面方形状に低く削り出された蛇の目高台であり、高台径は6.2cmである。胎土は軟質で、内外面に灰白色の施釉が施される。京都産。17は灰釉陶器の碗の底部である。底面は轆轤ナデ後に断面方形状の高台が貼り付けられており、高台径は9.2cmを測る。内面に釉薬が施されており、底部外面にトチン痕を残す。18は青磁碗の底部である。断面方形状の高台が貼り付けられた輪高台であり、高台径は4.7cmを測る。全面に灰オリーブ色の釉薬を施しており、体部内面にトチン痕、底面にトチンと思わしき付着物が融着する。越州窯系か。15～18は9世紀に属すると考えられる。

(3) 第2面遺構出土遺物

〔溝〕

溝 0005 (図 15)

平瓦一点のみの掲載である。19は残存長19.1cm、幅16.7cm、厚さ1.8cmを測る。凸面は布目圧痕、凹側は縄目圧痕が残されている。焼成は硬質である。12世紀以降の瓦か。

〔土坑〕

土坑 0006 (図 15・図版 6-1)

20～22は土師器の皿である。20は皿Shで、口径6.9cm、器高1.9cmを測る。体部が外反しながら立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し端部は丸く収められる。体部外面下半には指押さえ痕が残る。21・22は皿Nである。21は口径7.9cm、器高1.8cmを測る。体部が外反しながら立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し端部は丸く収められる。体部外面下半には指押さえ痕が残る。22は口径9.9cm、器高2.0cmを測る。体部が外反しながら立ち上がり、口縁部はやや内湾し端部は丸く収められる。何れも8A段階に属し、14世紀後半に比定される。23は東播系の須恵器の片口鉢である。口径29.8cm、残存器高10.5cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部が上下方に拡張し、「く」の字状になる。13世紀の所産と考えられる。24・25は瓦質土器の羽釜である。どちらも口縁部のみの残存である。24は口径16.0cm、残存器高4.3cmを測る。口縁部がや

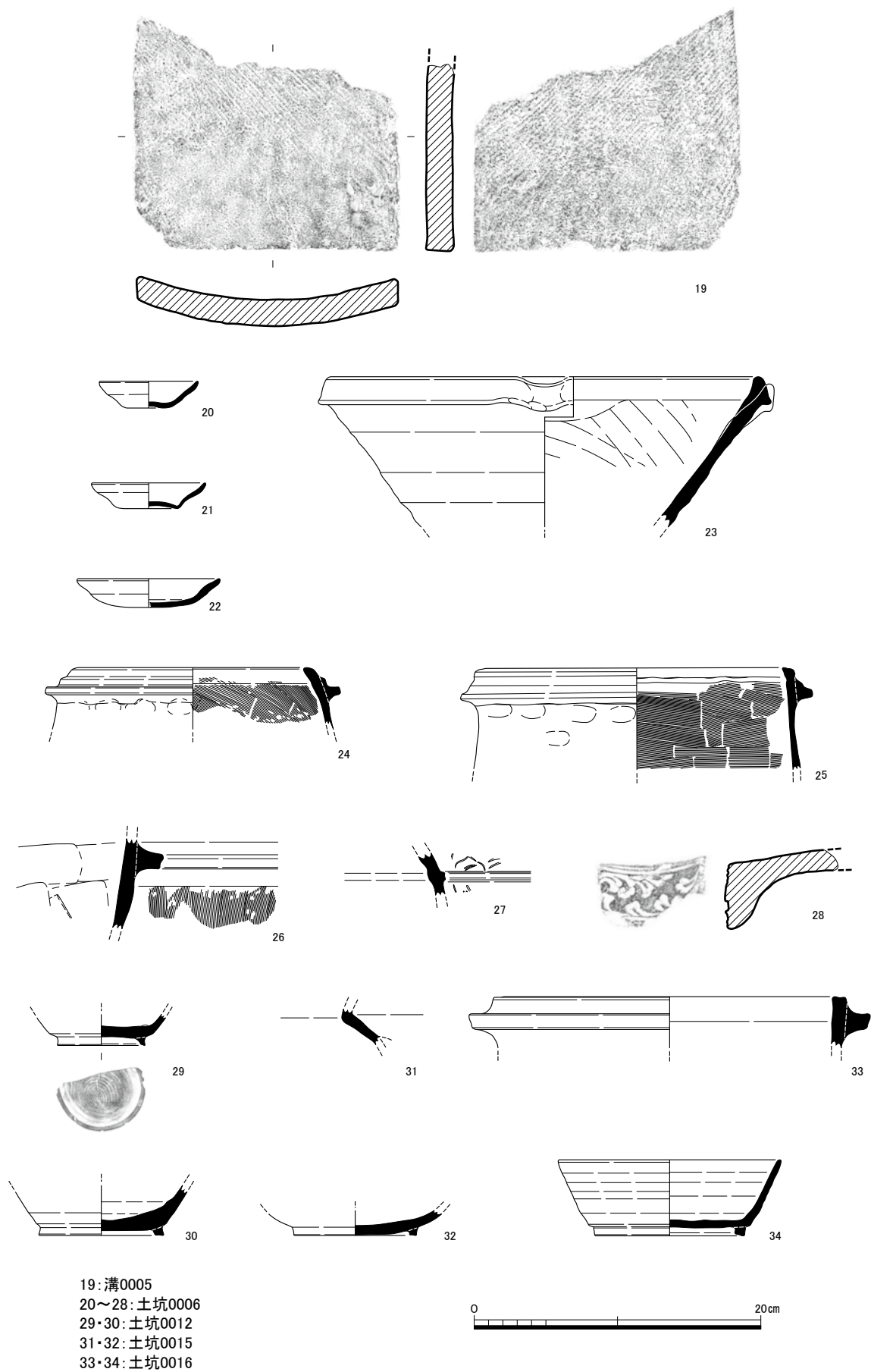


圖15 出土遺物2 (1 : 4)

や内傾しており、端部は平坦に収められる。体部外面にはオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整が施されている。口縁部付近に短い鐔が貼り付けられる。25は口径20.9 cm、残存器高7.1 cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部にてやや内傾して、端部は平坦に収められる。体部外面にはオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整が施されている。口縁部付近に短い鐔が貼り付けられる。何れも14世紀後半の所産と考えられる。26は土師器の甕である。口縁部だが、端部は欠損している。残存器高は6.3 cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、外面にはハケ調整、内面にはナデ調整を施す。口縁部付近に幅狭の鐔が貼り付けられる。9世紀の所産と考えられる。27は緑釉陶器で、四足壺の体部片と考えられる。残存器高は3.0 cm。体部は内湾しながら立ち上がり、外面に細い突帯が貼り付けられている。突帯より上下には劃花文が施される。猿投産で、9世紀後半のものと考えられる。28は唐草文軒平瓦である。瓦当幅5.5 cm、残存長7.8 cm、残存幅8.5 cm。文様の陰陽が逆になっている。折り曲げ式で、平瓦凹面部には布目圧痕が残されている。中央官衙系で、11世紀後半の所産と考えられる。

土坑 0012 (図 15・図版 6-2)

29は緑釉陶器の椀の底部である。底面に糸切り痕が残されており、断面三角形の高台が貼り付けられる。高台径は6.1 cmを測る。オリーブ色の釉薬が全面施されており、体部内面に重ね焼き時のトチン痕が二ヶ所融着する。焼成は硬質である。10世紀後半の所産か。30は灰釉陶器の底部で、長頸瓶と考えられる。底面はヘラ削り後に断面方形状の高台が貼り付けられ、高台径は8.7 cmを測る。底部内面のみに自然釉が付着していることから、口が窄まっている器形と推定される。猿投産で、9世紀の所産と考えられる。

土坑 0015 (図 15・図版 6-2)

31は白磁の四耳壺の頸部と考えられる。残存器高は2.5 cm。体部は内湾しながら立ち上がり、頸部にて「く」の字形に外反する。外面に耳の痕跡が残存する。華南産で、12世紀の所産と考えられる。32は灰釉陶器の皿の底部である。底面はヘラ削り後に断面方形状の高台が貼り付けられ、高台径は8.5 cmである。内面のみ施釉が施される。猿投産で、9世紀前半の所産と考えられる。

土坑 0016 (図 15・図版 6-2)

33は土師器の甕の口縁部である。口径23.0 cmで、口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。口縁部付近に幅狭の鐔が貼り付けられる。9世紀の所産と考えられる。34は須恵器の坏Bである。口径15.4 cm、高台径10.3 cm、器高5.3 cmを測る。底面はヘラ削り後に断面方形状の高台が貼り付けられている。体部は直立しながら上方へ上がり、口縁端部は丸く収められる。篠窯産で、9世紀前半のものか。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、平安京の条坊路である馬代小路と近衛大路の交差点、平安時代前期～中期の邸宅地の検出が期待されたが、平安時代前期～中期に属する遺物は多く混入するものの、その時期に該当する遺構は見つからなかった。だが、南北朝期から室町時代における遺構及び整地層を検出したことにより、中世の右京域の土地利用の歴史の変遷を考察する資料を得ることが出来た。以下、今回の調査成果について、時期毎に説明する。

1 南北朝期～室町時代（図 16）

当調査区内では、当該期のみ遺構及び整地層の検出となった。包含する遺物より、第2面の遺構は14世紀後半までには埋没し整地され、15世紀前半に第1面の遺構が形成されたと考えられる。

第1面にて検出した室町時代の南北方向の溝 0001 は、北にいくとやや西側にカーブするものの、南側はほぼ正方位にのっており、溝の西肩が馬代小路東築地心推定ライン上に位置していることから、馬代小路との関連性を想起させる。今日までの調査事例より、右京域では平安時代中後期以降において、西大宮大路、西叡負小路、西堀川小路、野寺小路、道祖大路、宇多小路、木辻大路、山小路、恵止利小路など、南北方向条坊路の多数が水路もしくは流路化していることが判明している。近世の地形図においても、右京域にて流路化した南北条坊路がそのまま灌漑用水路として利用されていることが窺え、馬代小路も水路として描かれている。溝 0001 の埋土は粗砂と砂礫層で構成されており、その西肩もはっきりしないことから、恒常的に水が流れていたものではなく、洪水によって形成されたものと推定され、流路化していた馬代小路が氾濫により流路幅が一時的に拡幅したものの或いは支流となったものである可能性も考えられる。また、溝の東肩につくられていた小堤状遺構 0021 は、2層を除去した後にその東肩を検出している。このことから、南北朝期の整地層が広がる以前にはこの小堤は存在しており、それより東側を整地したことにより西側との高低差が生まれ、流路幅が東へ広がらなかった可能性も考えられる。

第2面では南北方向の溝 0005、小堤状遺構 0021、多数の土取り穴を検出している。調査区中央部にて検出した溝 0005 は、溝 0001 東肩の小堤状遺構 0021 より約 0.4～0.5 m 東に位置しており、ともに軸が正方位にのっていることから、溝 0005 及び小堤状遺構 0021 は平安京条坊を意識したものと考えられる。近世の地形図によると、右京域において耕作地に伴う小道・小字境・水路などは平安京条坊路の痕跡であることが認められ、その境に畦畔や小溝も伴っていた可能性がある。小堤状遺構 0021 が調査区北西側の土坑 0011・0012 の直上に造築されていること

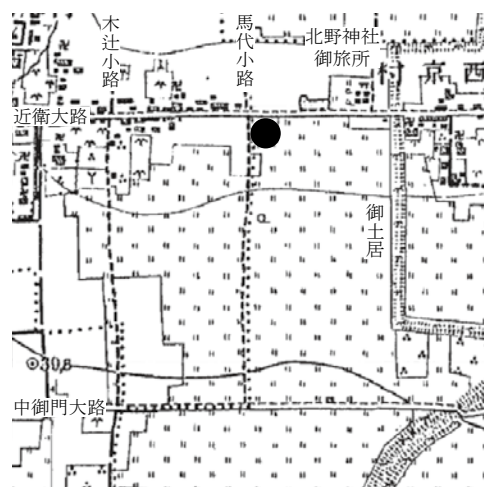


図 16 明治二十五年仮製地形図
(近代京都オーバーレイマップより) に加筆

から、溝 0005 及び小堤状遺構 0021 が相伴したと仮定した場合、それらの土坑が埋められた後に畦畔・灌漑用水路として機能し、南北朝期に廃絶したものと想定される。調査区の東側にて検出した土取り穴群のうち土坑 0006 は、埋土より南北朝期の土器類が出土している。それ以外の土取り穴群は明確に南北朝期と判別できる遺物が見つかっていないが、埋土の様相が土坑 0006 と類似していることから、同時期に埋没したものと考えられよう。土取り穴群の開削時期は不明であるが、条坊路推定位置のエリアにも地山層を掘り込んでつくられているため、これらの土坑群が成立した段階においては、既に条坊路が衰退し道幅の縮小が進んでいる平安時代中後期以降のものであると想定される。当調査地にて第 2 面の遺構の埋没及び整地が行われる時期である 14 世紀後半は妙心寺の開創時期と近いことから、妙心寺周辺の開発と関わっている可能性も考えられる。また、土取り穴群の開削時期と埋没時期に時期差がほぼないと仮定した場合、当調査区内で採取された土が妙心寺の創建に伴う土木事業に利用されている可能性もあり得るだろう。土取りについて、日本中世の土木事業は僧侶を主導者として展開していたとも言われている。だが、整地後の遺構面である第 1 面の検出状況から察するに、整地後も集落地としてではなく、耕地として土地利用されていた可能性が高い。

2 平安時代前期～中期

当調査区内では、平安時代前期～中期の遺構は検出されなかったが、中世の遺構の埋土及び整地層には当該期に属する須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦が多く混入していた。調査地周辺では平安時代前期～中期の邸宅跡に関する遺構が多数見つかっており、当調査区内においては馬代小路と近衛大路の交差点推定位置を含んでいることから、それらの検出が期待されたが、中世期における整地及び土取りによって完全に削平されたものと考えられる。ただし、馬代小路や近衛大路に関しては、周辺調査においても明確な遺構の検出がなされておらず、実際の条坊路の位置が推定位置よりずれている可能性も否定できない。

以上、今回の調査によって、平安時代後期以降、右京域が官衙や貴族邸宅の地として衰退し、耕地化が進んでゆく過程の中で、当地においても、中世期の畦畔や灌漑用水路と思わしき遺構が検出されたことから、同様の傾向が認められることが判明した。また、妙心寺創建期段階において、当地で大規模な土取り及び整地が行われていたことを示唆する資料を発見した。当地と妙心寺の関連性について文献史料に認めることは出来なかったが、今回の調査成果より当地まで影響が及んでいた可能性も考えられよう。今後周辺で行われる調査によって、当該期における土地利用の歴史的変遷の解明の進展が期待される。

参考文献

- 東洋一「平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011 年
五十川伸矢「土取りの歴史的変遷」京都大学埋蔵文化財調査報告 4 1991 年

表4 遺物観察表

() は残存値

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
1	青磁	碗	南区		溝 0001 粗砂層	-	-	(3.6)	(釉) 明緑灰色 (胎) N8/0 灰色	龍泉窯系
2	土師器	皿	南区		溝 0001 砂礫層	8.9	-	(1.9)	7.5YR8/4 浅黄橙色	
3	焼締陶器	播鉢	南区	F1	溝 0001 砂礫層	-	-	(3.6)	5YR4/2 灰褐色	備前
4	緑釉陶器	碗	北区	C1	溝 0001 砂礫層	-	8.6	(1.7)	(釉) 7.5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) 7.5YR7/4 にぶい橙色	
5	土師器	皿	南区	F・3・4	第2層 (黒褐色砂泥)	8.0	-	1.6	7.5YR8/6 浅黄橙色	
6	土師器	皿	南区	E・3・4	第2層 (黒褐色砂泥)	10.6	-	2.4	7.5YR8/4 浅黄橙色	
7	土師器	皿	北区	A～C・3	第2層 (黒褐色砂泥)	10.0	-	2.8	10YR8/2 灰白色	
8	施釉陶器	仏花瓶	北区	A～E・1	第2層 (暗褐色粗砂～シルト)	-	4.6	(2.9)	(釉) 5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) 10YR8/1 灰白色	古瀬戸
9	焼締陶器	甕	南区	F2	第2層 (暗褐色砂泥)	-	-	3.0	5YR3/4 暗赤褐色	常滑
10	青磁	皿	北区	A・B・2	第2層 (黒褐色砂泥)	9.8	3.6	2.2	(釉) 5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	同安窯系
11	白磁	碗	南区	F2	第2層 (暗褐色砂泥)	-	5.9	(3.6)	(釉) 5Y8/1 灰白色 (胎) 10YR7/2 にぶい色	華南産系
12	瓦質土器	羽釜	南区	F・3・4	第2層 (黒褐色砂泥)	23.4	-	(9.7)	10YR6/2 灰黄褐色	
13	瓦質土器	羽釜	北区	A～C・3	第2層 (黒褐色砂泥)	26.8	-	(11.3)	2.5Y3/1 黒褐色	
14	瓦	平瓦	南区	F・3～4	第2層 (黒褐色砂泥)	(長) (13.0)	(幅) 18.2	(厚) 1.9	N6/0 灰色	
15	須恵器	壺或いは広口瓶	北区	A～C・4	第2層 (黒褐色砂泥)	-	11.6	(5.1)	N6/0 灰色	篠窯産か
16	緑釉陶器	皿	北区	A～C・3	第2層 (黒褐色砂泥)	-	6.2	(1.6)	(釉) 7.5Y7/2 灰白色 (胎) 10YR8/2 灰白色	京都産
17	灰釉陶器	碗	北区	A～C・4	第2層 (黒褐色砂泥)	-	9.2	(3.5)	(釉) 10YR8/1 灰白色 (胎) 10YR8/1 灰白色	猿投産
18	青磁	碗	北区	C4	第2層 (黒褐色砂泥)	-	4.7	(3.0)	(釉) 5Y5/3 灰オリーブ色 (胎) 2.5Y7/2 灰黄色	越州窯系か
19	瓦	平瓦	南区	E・F・5	溝 0005	(長) (19.1)	(幅) 16.7	(厚) 1.8	N4/0 灰色	
20	土師器	皿	南区	E・F・4	土坑 0006	6.9	-	1.9	10YR8/2 灰白色	
21	土師器	皿	南区	E・F・4	土坑 0006	7.9	-	1.8	7.5YR7/4 にぶい橙色	
22	土師器	皿	南区	E・F・4	土坑 0006	9.9	-	2.0	7.5YR7/4 にぶい橙色	
23	須恵器	鉢	南区	E・F・4	土坑 0006	29.8	-	(10.5)	N5/0 灰色	東播系
24	瓦質土器	羽釜	南区	F3	土坑 0006	16.0	-	(4.3)	N4/0 灰色	
25	瓦質土器	羽釜	南区	E・F・4	土坑 0006	20.9	-	(7.1)	N4/0 灰色	
26	土師器	甕	南区	F3	土坑 0006	-	-	(6.3)	10YR6/3 にぶい橙色	
27	緑釉陶器	四足壺	南区	F3	土坑 0006	-	-	(3.0)	(釉) 明緑灰色 (胎) 5Y7/1 灰白色	猿投産
28	瓦	軒平瓦	南区	F6	土坑 0006	(長) (7.8)	(幅) (8.5)	(瓦当厚) 5.5	N4/0 灰色	中央官衙系
29	緑釉陶器	碗	北区	C・D・2・3	土坑 0012	-	6.1	(2.2)	(釉) オリーブ色 (胎) 10YR6/1 褐灰色	
30	灰釉陶器	長頸瓶	北区	C・D・2・3	土坑 0012	-	8.7	(3.5)	(釉) 10Y6/2 オリーブ灰色 (胎) 5Y7/1 灰白色	猿投産
31	白磁	四耳壺	北区	A・B・3	土坑 0015	-	-	2.5	(釉) 7.5Y8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	華南産系
32	灰釉陶器	皿	北区	A・B・3	土坑 0015	-	8.5	(1.8)	(釉) 5Y6/2 灰オリーブ色 (胎) N7/0 灰白色	猿投産
33	土師器	甕	北区	B・C・3・4	土坑 0016	23.0	-	(3.6)	7.5YR7/4 にぶい橙色	
34	須恵器	杯	北区	B・C・3・4	土坑 0016	15.4	10.3	5.3	N6/0 灰色	篠窯産か

図 版



1. 南区 第1面調査区全景（北から）



2. 北区 第1面調査区全景（南から）



1. 南区 溝0001 (北から)



2. 北区 溝0001 (北から)



1. 南区 第2面調査区全景（北から）



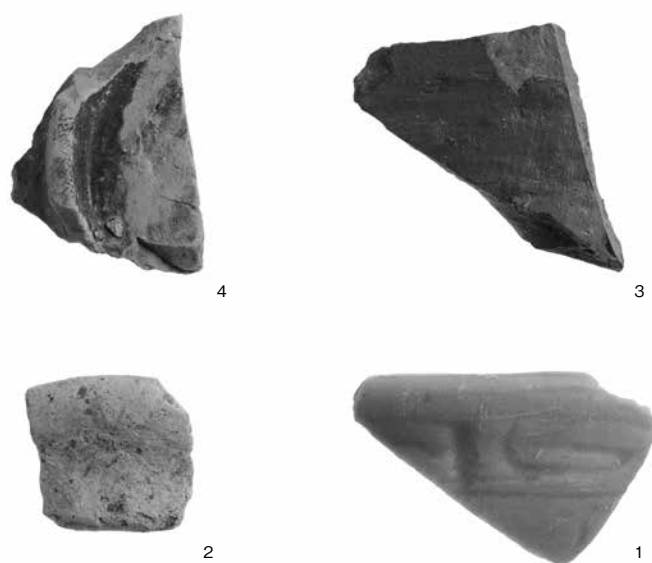
2. 北区 第2面調査区全景（南から）



1. 南区 小堤状遺構0021・溝0005（北から）



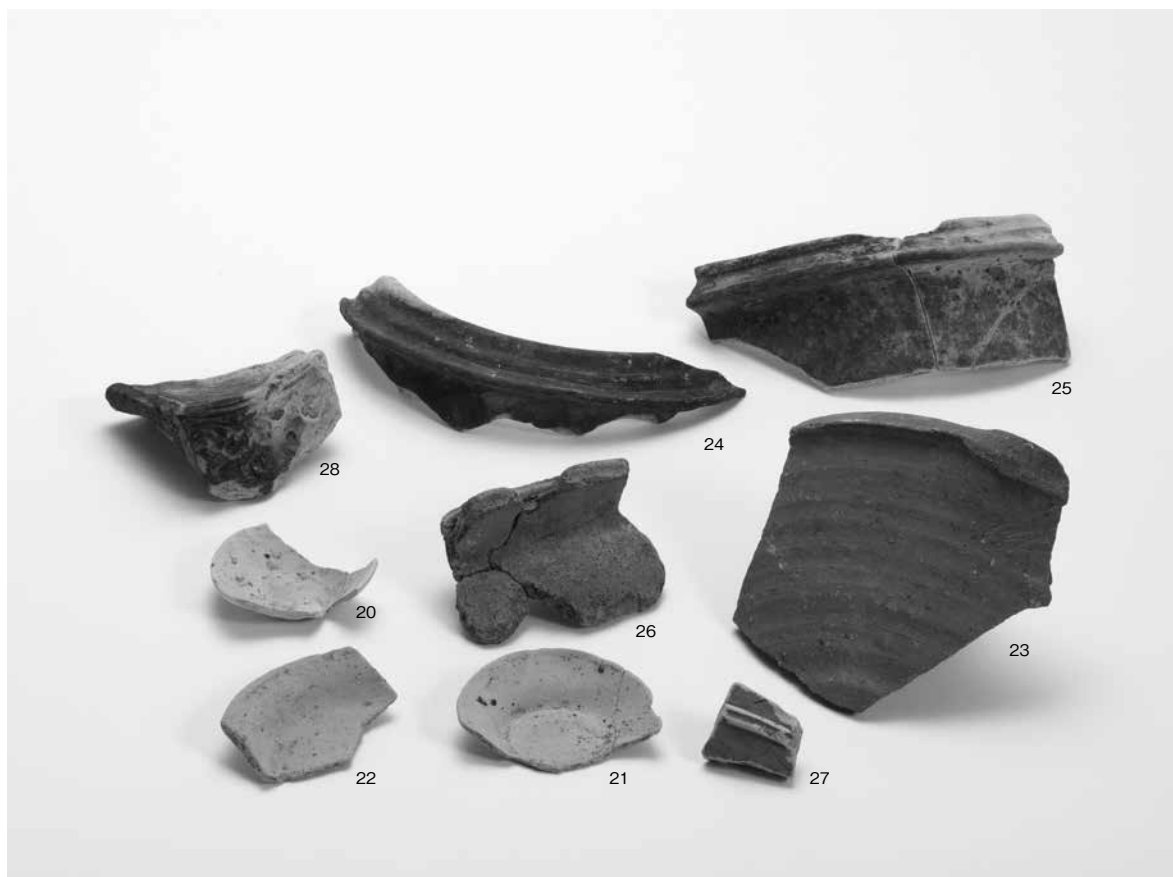
2. 北区 土坑0011（西から）



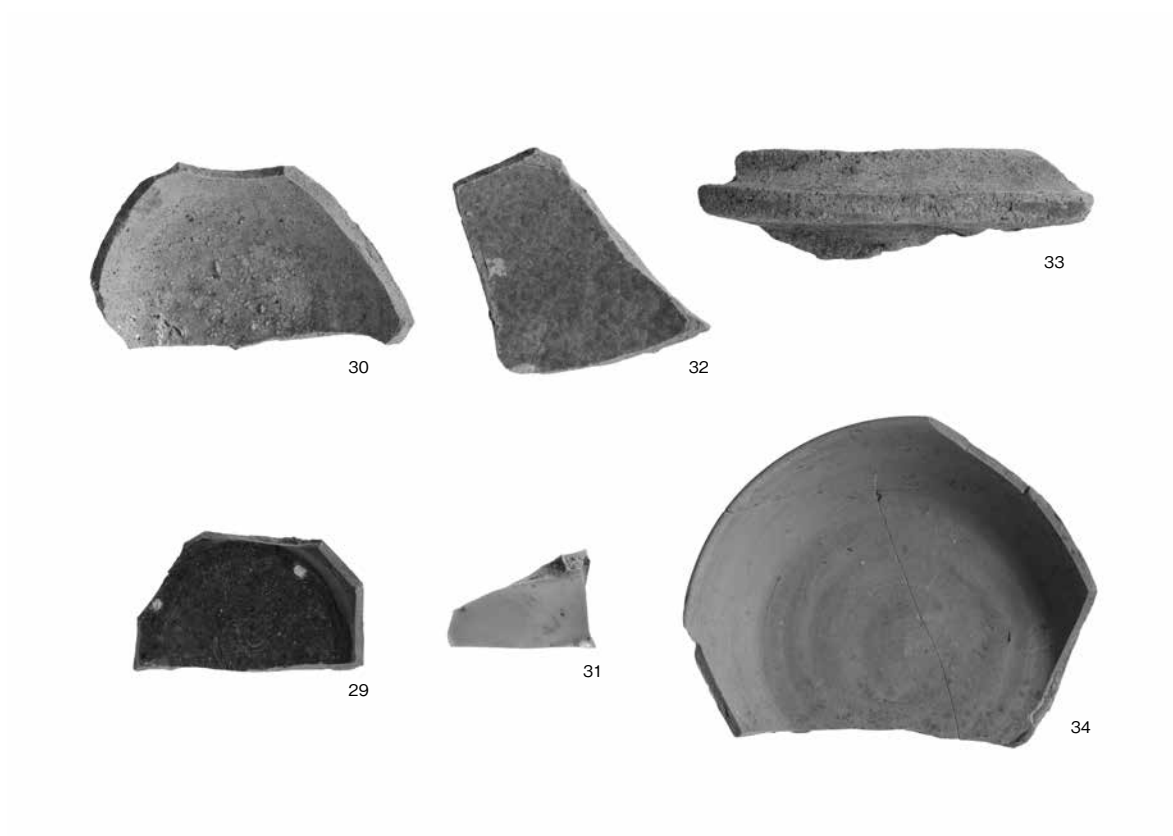
1. 第1面 溝0001出土遺物



2. 第2層 出土遺物



1. 第2面 土坑0006出土遺物



2. 第2面 土坑0012・0015・0016出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうさんぼうろくちょうあととはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京右京一条三坊六町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	望月麻佑 吉川絵里							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2021年1月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょういちじょう 平安京右京一条 さんぼうろくちょうあと 三坊六町跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にしのかうはくらくちょう 西ノ京伯楽町 4－6, ばだいちょう 馬代町3－3	26100	1	35度 01分 15.2秒	135度 43分 37.4秒	2020年 10月9日 ～ 2020年 11月13日	220㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京右京一条 三坊六町跡	都城	室町時代		溝		土師器 陶磁器類		・ 室町時代の溝と南北朝期までの溝、小堤状遺構、土坑を検出し、中世における調査地の土地利用の歴史的変遷を考察する資料を発見した。 ・ 平安時代前期から中期に属する遺構は検出されなかったが、中世の遺構の埋土及び整地土から遺物が多量出土した。
		南北朝期		溝 小堤状遺構 土坑		土師器 須恵器 瓦質土器 陶磁器類 瓦		

文化財サービス発掘調査報告書第14集

平安京右京一条三坊六町跡 発掘調査報告書

発行日 2021年1月29日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961